

「先生」

廊下を歩いていたら、背後から呼びかけられた。

振り返れば、「タヒコ」が頬を薔薇色に染めて小走りにくる。

「タヒコ」とは、海から小船で流れついたとされる島の海の神様だ。

この世の者とは思えぬほどの美少年だったと伝承されていることから、島の海の男らしからず、女子より白い肌に可憐で端正な顔、中性的で

儂げな雰囲気のある彼にふさわしいと、その愛称で呼ばれているらしい。

「部活のときに薬品を使いたいで、放課後にきてくれませんか」

小走りにきて、息があがっているだけでない熱っぽさを受けつつ「いいよ」とだけ言う。

そっけない返事に、物足りなさそうな顔をして尚も口を利こうとしたのを「先生」と別の呼びかけに遮られた。

さつき歩いていたほうに向き直れば「カラテゴリラ」がいた。

愛称の由来はそのまま、肌がひどく焼けてゴリマッチョで空手部だから。

挨拶や用件を口にするでもなく、険しい顔で歩み寄ってきたのに、タヒコは肩を跳ねて目をそらし、ほんのすこし迷ったようながら「じゃ、放課後、お願いします」とそそくさと去っていった。

廊下の角を曲がって、小さな背中が見えなくなってからカラテゴリラに目をやると、苛ただしそうに僕を見ている。

タヒコを目で追いかけていないのが意外だったものを、苦笑して「女の子を苛める小学生みたいだ」と言ってしまう。

怒ると思ったカラテゴリラは、口を結んで苦々しい顔をした。

これまた意外な反応に目を丸くしているうちに、手首を掴まれ引っ張られ、固い胸にもたれたなら、顔を寄せて囁かれた。

「明日」

「へ」と間の抜けた声を上げる暇なく、手首を掴んでいた手で僕になにかを握らせてから、背を向け、カラテゴリラも早々に角を曲がって消えてしまった。

「明日」の熱っぽい吐息に耳が疼いて、片耳を手で覆いながら、もう片手を広げれば、飴があつた。

もちろん、飴をもらうなんて、はじめてだ。

顔に似合わず大阪のおばちゃんみたいだと思いつつ、学園祭の時のことを思いだした。

あのかきは、僕がタヒコに食券を手渡した。

嬉しがり、どきくさに紛れてタヒコが僕に抱きついていたのに、つい振り返りそうになった。

いつもの僕なら、直前に誰と話したか、とつくに忘れていただろうに。背後にいたのが、タヒコと因縁のあるカラテゴリラだったからか。

セーラー服姿で海パンを見せていた印象が強く残っていたから、意識せざるを得なかったのだと思う。

僕を好きなタヒコを好きなカラテゴリラは、どんな顔をしているのだろう。

野次馬的好奇心がなくなかったとはいえ、なんとなく、見てはいけなく思えて、寸で顔を向けるのを留めた。

けど、カラテゴリラは見咎めて、怒ったようだった。

僕が恋心を知っておきながら、わざと、そのことを伝えず、腹の中で笑っていた。

というふうには、カラテゴリラの目には写ったらしい。

聞かれなかったから、言わなかった。

それだけだったし、正直、タヒコが僕を好きなのも、カラテゴリラがタヒコを好きなのも、どうでもよかった。

興味があつたのは、カラテゴリラが彼に似ていることと、その上でお仕置きをしてくれることだった。

欲しかったのは、罰に見合った屈辱と痛みだ。

のに「学校ではだめ」という約束を破ってまで襲いかかってきたくせに、カラテゴリラはまともにセックスをしようとした。

代用ではなく僕を僕として、触れてくる手や舐めてくる舌は荒々しく、でも、指つきはいやらしくて、火傷しそうに体を熱くされ喜び狂わされた。

おまけに、みつともなく僕だけイカされるならまだしも、カラテゴリラが勃起して完勃ちしたのを挿入したがる始末。

いつもは、一方的に快感を引きずりだされるだけで、無反応なカラテゴリラにその後はひたすら痛めつけられて、吐かされて、吐しゃ物に浸るのを放置される。

快感に痺れる体を手荒く扱われると、痛みや苦しみが倍増するとはいえ、だからこそお仕置きにはいい。

後半部分がないと、カラテゴリラとセックスする意味はなかった。

別に、録音されたものを校内放送で流されてもかまわなかった。

それでいて脅迫を受け入れたのは、生徒と肉体関係を持つ教師という、世間体が悪い立場になりたかったのと、心だけでなく肉体にも傷を負わせたかったからだ。

いや、生徒とセックスすることの何が悪いのか分からない僕に、心の負担はないかもしれない。

そのこともお仕置きしてもらうために、尻に鞭を打ってくれるようなセックスを求めるのかもしれない。



僕を教師失格にしてくれ、強姦まがいな乱暴にしてくれるカラテゴリは、都合のいい存在だったが、相手にも都合がある。

学園祭で襲いかかってきた彼は、ひどく情緒不安定だった。

躍起になったように、勃起して僕を善がらせたまま突っこもうとして、僕が足をつらせて台無しにしても怒らないで介抱してくれ、そして、泣いた。

泣いた理由は知れないものの、心境の変化があつたのだろう。

以来、二週間ほど僕を避けた。

前は三日に一度は、セックスを誘ってきたのに。

そもそも、美少年の神に例えられるタヒコの代わりに、似ても似つかない冴えない教師の僕を見立てるなんて無理があつたわけで、今更ながら、そのことを思い知つたのかもしれない。

はじめから、僕に代用が務まるとは思えなかつたから、遅かれ早かれ、カラテゴリラに愛想を尽かれるだろうことは分かつていた。

「彼に似ていたのに」と思うと惜しかったとはいえ、しかたない。そう思つていた。

学校でセックスしようとして泣いて避けて、しばらくして、飽なんか渡して、また誘つてきたカラテゴリラの思惑なんて知る由もない。

学園祭でセックスのしかたを変えたのを考えると、そのとき未遂にな

ったこともあり、今度こそ挿入され抜き差しされイカされる可能性が高い。

いや、泣いたのをなかつたことにしたくて「気を許したと勘違いするなよ！身の程を弁えろ！」と後ろをほぐさずに突っこんで、血を散らしながらえぐってくれるかもしれない。

流血沙汰になる可能性もあるなら、逢引をすっぱかすのは、もったいない。

その見込みが外れたとしても、後のことは、後になって考えればいいさと、ぐずぐずするのが面倒になって、早々に悩むみを放る。

袋を破って、取りだした飴を口の中に放ったら、海の味がした。



